

小林秀雄著『本居宣長』：二十六章主題『やまと魂』(F)に對する、眞淵・宣長の洞察[F:『文辭の麗しさ』・姿(調)・沈黙『皇大御國』]と、篤胤(標語化)との懸隔:その「關係論」的纏め

①文事の経験(『低き所を固める』。物:場 C')②『萬葉』(物:場 C')⇒からの関係:(承前)ところが、⑤の仕事では、「③:この①[古言(言靈:古今集・冠辭)⇒低き所(轉義)⇒合體(姿・調:F)]といふものが、全く缺落(D1の至小化)してゐる」⇒「④:『やまと魂』(③的對立概念F)⇒E:④の古意(物:場 C')が『雄武(ますらたけ?)を旨とする心』とわかれば[とは、『意は似せ易い』即ち『古の大義(『ますらをぶり』物:場 C')を口眞似(語釋:D1の至小化)]を手掛りとすれば」、⑥の心のうちに下してゐる②といふその根(言靈:古言・冠辭)はどうでもよいものであつた。まして『源氏』(物:場 C')の如き、中古文弱(D1の至小化)の書を、『古學(物:場 C')の要用(D1の至大化)なる書』のやうに言ふのは、宣長の『玉の小櫛』(物:場 C')を誤解(D1の至小化)するものとした」(④への距離不獲得:Eの至小化)⇒⑥眞淵(△粹)／⑤篤胤(△粹)の①への適應異常。

からの関係(D1の至大化)

*「(承前)ところが、⑤の仕事では、「③:この①[古言(言靈:古今集・冠辭)⇒低き所(轉義)⇒合體(姿・調:F)]といふものが、全く缺落(D1の至小化)してゐる」(D1の至小化)」。

E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法]…「So called」「Fと(△粹)との距離獲得」(Eの至大化)。

*「④の古意(物:場 C')が『雄武(ますらたけ?)を旨とする心』とわかれれば[とは、『意は似せ易い』即ち『古の大義(『ますらをぶり』物:場 C')を口真似(語釋:D1の至小化)]を手掛りとするれば、⑥の心のうちに下してゐる②といふその根(言靈:古言・冠辭)はどうでもよいものであつた。まして『源氏』(物:場 C')の如き、中古文弱(D1の至小化)の書を、『古學(物:場 C')の要用(D1の至大化)なる書』のやうに言ふのは、宣長の『玉の小櫛』(物:場 C')を誤解(D1の至小化)するものとした」(④への距離不獲得:Eの至小化)。